

1. 教育の責任

【専門教育科目】

- 応用栄養学実習（1年後期：1単位 栄養士，栄養教諭二種免許必修）
- 臨床栄養学Ⅰ（1年後期：2単位 栄養士，栄養教諭二種免許必修）
- 臨床栄養学Ⅱ（2年前期：2単位 栄養士，栄養教諭二種免許必修）
- 臨床栄養学実習（2年前期：1単位 栄養士，栄養教諭二種免許必修）
- 栄養指導論Ⅱ（2年後期：2単位 栄養士，栄養教諭二種免許必修）
- 栄養指導論実習（2年後期：1単位 栄養士，栄養教諭二種免許必修）
- 公衆栄養学（1年後期：2単位 栄養士，栄養教諭二種免許必修）
- スタディスキルズⅡ（1年後期：1単位 卒業必修）
- 特別研究Ⅱ（2年通年：2単位 卒業必修）

【栄養教諭二種に関する科目】

- 学校栄養教育論（1年後期：2単位 栄養教諭二種免許必修）
- 栄養教育実習（2年通年：2単位 栄養教諭二種免許必修）
- 教職実践演習（2年後期：2単位 栄養教諭二種免許必修）

以上の科目の補助を行っている。実習では、食材分配等の授業の準備，授業中の机間指導，課題発表時にコメント等を行っている。講義では、資料の準備，環境整備等を行っている。スタディスキルズⅡ，特別研究では、研究テーマに関する情報や資料の提供等の補助を行っている。教職科目では、教育実習へ向けての教材研究や模擬授業等の指導の補助，教育実習の依頼や実習期間の調整等を行っている。1年生のクラスアドバイザーとして、学生の日常生活や進路等についてアドバイスをを行っている。また、卒業生を対象とした管理栄養の国家試験の対策講座では、臨床栄養学を担当し、国家試験の勉強方法や出題傾向を踏まえながら指導を行っている。

2. 教育理念と目的

食物栄養学科の教育目標に「根拠に基づきながらも対象者によりそった栄養の指導と給食の提供をできる栄養士」とあるが、私の教育理念は、人にとっての「食ること」の意味を理解し、自身の日常生活に活かし、さらに対象者に寄り添うことができる学生を育てることである。栄養士の業務は、栄養の指導や給食の運営であり、人々の健康の支援をしていく。対象者の生活の質を大切にし、生活背景や食習慣、食の好みなどを考えながら、対象者に寄り添い栄養の指導や給食の運営をしていくことが大切である。そのために、まずは自分自

身の生活に活かすことで、自分自身の経験を通して発見や工夫があり、説得力が生まれる。それは、対象者の生活の質を高めることにも応用することができる。さらに、自ら専門性を広げ深めていく努力をすることで栄養の関連領域の相互関係を理解し根拠に基づいた判断が可能となり、対象者に信頼される栄養士になることができると考える。様々な職域や対象者がいる中で、専門職として知識や技術を習得し、常に学ぶことが必要とされ、その知識や技術を日常生活に活かし自分自身が健康的な食生活を送ることも対象者との信頼関係を築くうえでも大切なことである。そのような姿勢は、対象者の生活の質を大切に思い、寄り添うことを意識しながら、食を通して健康を支えるうえで栄養士に求められることだと考える。

3. 教育の方法

補助で付いている科目の多くは栄養士必修科目であり、講義・実習の両方であるため実習では講義で学んだ知識の定着を図り、技術を身に着けるための手助け、他の科目との繋がりを意識することができるような声かけを意識している。

応用栄養学実習、臨床栄養学実習ではライフステージや疾病に合わせた献立作成、食事の提供方法を考えなくてはならない。対象者に応じた食事となっているか、実際に自分がその対象者の立場となり食べるなら？ということを学生が自分自身で考え、気づきが得られるようにヒントを与えることや声かけを心掛けている。また、献立を立てられるだけでなく、きちんと調理することができるということも必要であるため、調理技術等についても不足な場合があれば適宜声かけを行っている。

栄養教諭に関する科目では、教育実習での研究授業の準備に関する指導が中心である。学生自身が決めた研究授業のテーマに対して、児童・生徒が興味を持ち、積極的に授業に参加できるかどうか、理解できるかどうかということ意識しながら指導案の作成や教材作りの指導を行っている。

4. 評価と成果

実習では、回を重ねていくことで対象者にとっての食べやすさや喜びなどを徐々に意識することができていると感じている。献立作成では、指示量を守ることに偏ってしまい、盛り付け時の量のバランスや味付けがおろそかになることが多く、そのような点については失敗することで次につなげることができていると感じた。さらに、発表する際にも具体的な改善点やアイデアなどの意見が出てくる場面も徐々に増えていることから、より対象者にとって好ましいものを提供するためにどうしたらよいかということをも自分で考える力が養われてきているのではないかと感じた。

また、実習では講義で学んだことや他の科目で学んだことを基に課題に取り組むことが多いが、学生自身が科目間の繋がりを意識することがあまりできていないように感じた。このことから、今後はより科目間の繋がりを意識することができる指導を適宜行っていくことが必要である。

5. 今後の目標

- ・科目間の繋がりを意識しながら授業の補助を行うこと
- ・常に新しい情報や知識にアンテナを張り、学生へ還元できるようにする
- ・研究成果の発表（学会発表や論文投稿）を行う

6. 根拠資料

シラバス，学生便覧